

研究ノート

朴花城の1950年代の作品と『明日の太陽』について
A Study of Park Hwa-Seong's Novels of the 1950s and "Naeire Taeyang"

山田 佳子*
YAMADA Yoshiko

1 はじめに

本稿は韓国の文壇で1925年から1985年までの60年にわたって執筆活動を続けた作家、朴花城（パク・ファソン）を取り上げる。朴花城は現在の韓国ではいわゆる「大衆作家」とみなされているが、日本の統治期には左翼的な活動に関与し、資本家や植民地権力に抵抗の姿勢を示す内容の作品を書いていた。そのためか韓国の文学史ではその時期の作品については言及、解説されているが、植民地からの解放後¹に数多く執筆された長編小説についてはほとんどその内容が論議されぬまま、ただ男女の恋愛をモチーフに「大衆小説」を書いたという理由から、朴花城イコール「大衆作家」というイメージが定着してしまったように思われる。

しかし最近、解放後の南北分断期における朴花城の思想傾向に関する信頼できる証言が出てきたことを契機に、朴花城研究に変化の兆しが現れはじめた。朴花城は1937年以後、解放後の1955年までほとんど執筆活動を行っていない。その理由についてこれまでは推測の域を出ることがなかったが、その間の思想の傾向を念頭に入れて解放後の作品を読み直してみるならば、新たな解釈が生まれる可能性がある。

本稿では1950年代に書かれた朴花城の長編小説に関する現在の研究状況を整理し、新聞連載後に映画化もされた『明日の太陽』について検討する。

* 新潟県立大学国際地域学部 (yamada@unii.ac.jp)

2 南北分断前後の文壇状況と朴花城の対応

1948年8月、分断国家として成立した大韓民国は「反共」を国是とした。間を置かずに制定された「国家保安法」や、翌年に創設された「国民補導連盟」は左翼活動を厳しく制限し、左翼活動に加担した者に転向を強制した。

文壇においては、解放直後の1946年2月に左翼系作家を中心として組織された「朝鮮文学作家同盟」に、左右の理念を超えて多くの作家が加盟していたが、南北分断が決定的なものとなっていく1948年に入ると、直接的な弾圧を受けるようになった²。このような過程で、一部の作家たちは北へ渡り、また、必ずしも左翼でなくとも極端な反共政策に恐怖を抱いて北に執筆の自由を求めた作家もいた³。

日本統治期の1925年に登壇した朴花城は、1926年から約3年間、日本女子大学英文学部に学んだ。その間、「権友会⁴」の東京支部長を務めるなど、左翼的な活動に関与していたことがこれまでの研究から明らかになっている⁵。帰国後に本格的に執筆活動を始めると、「下水道工事⁶」や「故郷のない人々⁷」をはじめとする、資本主義や満州への移住政策の矛盾を糾弾した作品、日本統治に対する抵抗の姿勢を直接的に表現した「プルガサリ⁸」などの作品を書きつづけた。

そのような作品傾向から、1937年の「かぼちゃ⁹」を最後に解放後まで作品を発表しなかったのは、日中戦争への突入とともに戦時体制が敷かれ、日本軍に協力的な作品や、日本語による執筆を求められるなか、それを嫌ったためであるとの見方が一般的であった。また、この時期に朴花城は活動家の夫と離婚して資本家と再婚しており、自らの生活とそれまでの作品内容との乖離が作品の発表を躊躇させた理由の一つであるとも推測された。

解放後の朴花城は南北分断に至る時期をささみ、1955年から本格的に執筆活動を再開したが、その作風は一見すると、過去の歴史と決別するかのように、有産階級の男女の恋愛をモチーフとするものに変化していた。そのため朴花城はその間に思想を捨て、大衆作家に変貌したと見られてきた。

しかし、朴花城と同郷の戯曲作家である車凡錫氏の証言によれば、朴花城は「朝鮮文学作家同盟」の木浦支部長を務めた経歴があり、そのために文壇での活動に支障があったという¹⁰。朴花城の自叙伝においても、朝鮮戦争勃発時に北朝鮮軍の南下を受け、ソウルから故郷の木浦に避難するさいに携行していた「市民証」に、その職歴が記載されていたことが確認できる¹¹。このことを根拠に、朴花城は断筆中も思想を維持していたとみなし、いわゆる娯楽志向の大衆小説であるという理由からこれまで研究対象とされてこなかった1950年代以降の作品に新たに光を当てようという気運が生まれた¹²。

一方、「朝鮮文学作家同盟」が左右の思想にかかわらず、多くの文学者の離合集散の組織にすぎなかったという点を強調し、朴花城の思想に対する性急な判断を留保する見方もま

た存在する。

3 朴花城の1950年代の作品についての2つの見方

執筆活動を中断していた解放前後の時期に、朴花城の思想が変化することなく維持されていたとみる徐正子は、解放後の作品に二重構造や象徴による表現方法を見出そうとする。これまでは多くの論者がそうであったように、解放後の作品が主として恋愛や結婚の問題をテーマとしていることを、単に作品傾向の変化ととらえていたが、上述の証言を根拠に、解放後の作品に設定された表面のテーマを、もう一つのテーマを覆い隠す創作上の技法によるものと解釈するのである。

例えば、主人公の「出生の秘密」が興味津々のストーリーを展開する『峠を越えれば¹³』の場合、主人公の産みの母が誰の想像をも超えて平壤出身の女性であったという設定は、現実とは直線ではなく、爬行を繰り返しながら弁証法的によい方向に向かっていくという意味を内包していると解釈する¹⁴。

また、医師として病院を経営する夫が浮気をしたことで離婚を迫り、自らは教育事業に身を捧げて生きていく決心をした女性を主人公とする『崖に咲く花¹⁵』において、朝鮮戦争が起こって元夫が北に拉致されると、主人公は元夫と浮気相手との間の子を、残された病院の後継者に任命する。徐はここにも『峠を越えれば』と同様のもう一つの隠された主題、すなわち「南北和合¹⁶」の意図が存在すると指摘する。

上述した徐正子の解釈とは異なる視点から、金福順は『峠を越えれば』が高等教育を受けられる有産階層の男女のストーリーであることを問題視する。特に男性人物3人がいずれも当時は数少ないエリートであった大学院生であることを挙げ、彼らが富と物質文明を当然のように受け入れている態度には、田で働く農民を目にしながらも彼らに富を分配しようとの自覚がまったく見られないと指摘する。また、朴花城の関心事がすでに階級問題から、国家・社会の建設へと移っており、3人の大学院生はそれぞれ発電、外交、医学の分野において国家の将来を担うことを期待された人材として設定されているが、そこには具体的な実践の場面がなく、実体のない「科学救国の近代主義¹⁷」が掲げられているにすぎないとみる。同様に、『崖に咲く花』の場合も、韓国初の女性科学者である主人公が「女性も科学の精神を持って暮らそう¹⁸」と自ら学校を創立して教育による救国を目指す、やはりそれも具体性に欠け、楽観的で空虚に響くと指摘する¹⁹。

金福順はこれらの作品を貫いているものが「上からの改革」、すなわち「楽観主義を基盤とした肯定の方法」による国家建設観であるとする。そしてそのような「楽観的近代主義」は浪漫的な色彩を帯び、大衆を慰撫すると同時に、新たな社会の建設を促す方法の一つでもあるという²⁰。

『峠を越えれば』は連載が終わってまもなく映画化されたが、金はその理由についても、作品の内容が当時の大衆の求める「肯定—楽観主義—新たな社会の建設—浪漫性」に応えるものであったためとみている。金のこの解釈についてはあとで再び言及する。

4 1950年代のジャーナリズムと朴花城の作品の関係性

朴花城は1950年代に5編の長編小説を発表したが、そのうち4編は全国紙の新聞に連載されている。1950年代は朝鮮戦争によって社会と文化の物的・制度的土台が崩壊したことを受け、国家権力を含む諸般の勢力が新たな文化の建設を標榜しつつ、各種の近代的文化企画を競って立案・推進するなか、激烈なヘゲモニー闘争が展開された²¹。

新聞はこの時期、「反共」を国是とする当時の李承晩政権から数々の取り締まりを受け、その影響下に置かれていたが、各紙はそれぞれの政治的立場を明確にし、政策論争を繰り広げることで独自の存在感を示した。なかでも『東亜日報』は反民主主義権力との闘争姿勢を前面に掲げて部数を伸ばしたが、もとより特定の政党のプロパガンダをすることはジャーナリズムの自殺行為であるという批判もあり、どの新聞も思うように収益は伸びず、経営が不安定であることは共通していた²²。

このような状況の下で、新聞各紙は紙面拡大による読者獲得を目指した。新聞連載小説は一般大衆を読者として引きつける有力な道具、すなわち商品としての価値が高まり、その結果、文学とジャーナリズムの関係に劇的な変化をもたらされた。有名作家の作品といえども、読者の反応が芳しくないとなれば、新聞側が一方的に連載を打ち切ることさえあった²³。

一方、このことは作家の側にも分化をもたらした。すなわち新聞側の要求を満たす作品を書くのか、あるいは新聞とは手を切るのかということである。この過程において、純粋文学のみを正当な文学とみなす一部の文学誌は、商業主義的な大衆文学を排除することに力を注ぎ、新聞や大衆雑誌との立場の違いを明確に示した²⁴。

新聞連載を主とし、さらに連載が好評で映画化もされるような作品を書いたこの時期の朴花城が大衆作家とみなされるのは、以上のことから疑問をさしはさむ余地がない。朴花城は『峠を越えれば』を執筆するまでに、その掲載紙である『韓国日報』から何度も要請を受け、最後は担当者が木浦にまで足を運んだという²⁵。それにしても当時の朴花城がそれほどまでに新聞から求められたのはなぜであろうか。

各紙がこぞって連載小説を掲載するなか、まだ余力があり、かつ読者の評判を獲得できる作品を書ける作家を見つけることは、どの新聞社にとっても頭痛の種だったようである。実績のない新人作家に依頼するようなことは大きな冒険であったという²⁶。しかし、『峠を越えれば』が解放後に執筆を再開して最初の長編小説であることを考えると、当時

の朴花城は大衆作家としては新人に等しかったとも言える。であれば朴花城の解放前の実績を評価しての起用であったとみることはできないであろうか。

そのように考えた場合、前述した徐正子の解釈に立ち返り、朴花城が解放前の思想を維持しているという前提での読み方が、1950年代の政治と社会、ジャーナリズム、大衆の嗜好に照らして成立する可能性があるかどうか、改めて検討してみる必要を感じさせる。

5 『明日の太陽』について

『明日の太陽²⁷』は朴花城が1950年代に新聞に連載した4編の長編小説のうち最後のものであり、『峠を越えれば』と同じく、連載後に映画化された。そのことからわかるように、大衆の興味を引きつける要素をじゅうぶんにもっている。

主人公が「真善美²⁸」を兼ね備えた完璧な女性であるという設定は朴花城の多くの作品に共通するが、『明日の太陽』の場合はそのような主人公ヒラが27歳の独身で、父親はいないものの暮らしは裕福であるにもかかわらず、喫茶店のレジ係として働いているということが何より先ず、事件の予感を抱かせる。ヒラは客として訪れたエリート銀行員ヒョンジンに見初められ、いつとき幸せな日々を過ごすか、話が結婚まで進んだ段階で、ヒラに離婚経験があり、息子までいることが明らかになる。ヒョンジンは2人で駆け落ちをする覚悟だが、ヒラはあくまで家族に祝福されての結婚を望む。そして悶着の末、結局、ヒラはヒョンジンの父親の病気の看護を献身的に行うことで信頼を得、ハッピーエンドの結末を迎える。

朴花城はこの作品のタイトルについて、「明日」とは「希望」と「理想」を意味し、「太陽」は「勝利」を指すとし、「明日というものは誰にでも無条件に訪れるのではなく、それを求めてひたすら血の流れるような努力をする者だけが手にすることのできる太陽なのだ²⁹」と述べている。たしかに主人公が困難を乗り越えて幸せを手に入れるまでの波乱万丈の展開は、毎日、読者に新聞を開く楽しみをもたらしたであろう。

ところで主人公の過去の結婚と離婚に関する事情に、この作品の伏線がある。朝鮮戦争時、「何らかの疑い³⁰」をかけられたヒラの父は軍に連行されそうになり、弁護士である叔父の口添えで事なきを得ることができた。父は結局、まもなく死亡してしまうのであるが、ヒラはそのときの担当軍人からの求婚を拒否できず、なかば強制的に結婚させられた。その軍人は北の出身であり、しかも北に妻のいることがのちに明らかになる。そして離婚に至るのである。

しかしその軍人との縁はさらに続く。ヒョンジンはヒラの過去を家族に隠そうとするが、やはり北出身であるヒョンジンの義兄、すなわち姉の夫がその軍人と同郷の同期であったために、ヒラの過去がすべて家族に暴露されてしまうのである。そのときヒョンジ

ンの父は一族の長に向かってこう言う。

「とうとうあの野郎がわが家を滅ぼすのです。血筋も定かでない北の野郎ですよ。婿だといっても、私はあの野郎と親しく話をしたことなどありませんよ³¹」

「あの野郎」というのは、ヒョンジンの義兄、すなわち父にとっては婿にあたる人物である。父は娘が北出身の男と結婚することに反対したが、本人たちの意志の固さに負けて結婚を許した形となっており、地方の家から上京したときも娘の家にはけっして泊まることがない。しかしヒラのことはたいそう気に入っているために、息子の結婚に水を差されたことが我慢ならず、婿に怒りの鋒先を向けるのである。

このように『明日の太陽』では、ヒラの最初の結婚の破綻、ヒョンジンの義兄に向けられた否定的な視線が、前述した徐正子の「南北和合」という解釈を不能にしている。

また、『峠を越えれば』と『崖に咲く花』に共通して描かれている日本統治期の独立運動に関する場面が『明日の太陽』には見られない。前の2作品では主人公ないしは登場人物のいずれかが過去に独立運動に加わっていた場面、または少なくともその事実が描かれているが、『明日の太陽』においてはそのような民族の抵抗の歴史に関する記述が影をひそめている。

先に見たように、金福順は『峠を越えれば』と『崖に咲く花』における有産階級中心の科学や教育による救国について、楽観主義に基づく、実体のない「上からの改革」であると述べたが、それと同じ文脈で金は1950年代の朴花城の作品において、過去の独立運動家や日本への協力者に対する描き方に疑問を提起し³²、それが李承晩政権のとったやり方に相通じていると指摘する³³。すなわち、「反政府の左翼こそが反国家反逆者³⁴」であるとして、左翼撲滅のために親日派処罰の問題から目を背け、独立運動家に代えて日本統治期の警察官を再登用したような李承晩政権の「楽観主義」と朴花城の作品とが同一線上にあるとみるのである。

さらに、金は言及していないが、朴花城自らが『明日の太陽』ではむしろ主人公の妹のほうに愛情を注いだ³⁵と明かしていることも注目される。主人公の妹は「将来の国会議員候補」「韓国の初代女性大統領³⁶」と期待される才媛であり、作品中にその内容が披露される「韓国外交の進路」と題された彼女の卒業論文が、「わが国はアメリカという『オーソリティー』と強力な紐帯関係を結ばなければならない³⁷」と結論づけられていることも、金の解釈について考えるさいに考慮すべき事柄である。

『明日の太陽』は『峠を越えれば』に続いて映画化されたが、これらの作品が大衆の人気を集めた理由がどこにあるのかについて、やはり当時の政権とジャーナリズム、大衆、そして作家朴花城の置かれた立場も含めて、諸方向からの検討が必要である。

6 おわりに

朴花城の1950年代の作品について検討するときには直面する問題は、日本による支配、解放、南北分断から、反共独裁政権の成立に至るまでの過程で、それぞれの局面における朴花城にとっての「民族」、「国家」というものが何であり、どのように変化していったのかということである。また、1950年代は日本の統治期よりも執筆活動にさらに多くの制約や条件が与えられていたことも考慮に入れなくてはならない。

本稿で取り上げた2つの論の違いは結局のところ、政治・社会的背景と複雑に絡み合いながら成り立っている作品の内容と構造の、どこに焦点を当てて解釈するかの違いに起因するものと思われる。

今後は1950年代の文学的状况をより明らかにしつつ、朴花城文学の統合的な研究に発展させていくことが必要である。

注

- 1 本稿では以下、植民地からの解放を「解放」とし、その前後を「解放前」、「解放後」と表す。
- 2 金在湧「冷戦的反共主義と南韓文学人の苦悩」、『歴史批評』37、1996、pp.277-278。
- 3 同上、p.287。
- 4 1927年5月に「新幹会」の姉妹団体として結成された女性運動団体で、キリスト教系女性運動と社会主義女性運動の統一を標榜した。
- 5 朴花城の東京滞在については、拙稿「朴花城の東京留学時代」(『県立新潟女子短期大学研究紀要』45、2008)参照。
- 6 朴花城「下水道工事」、『東光』1932.5。
- 7 朴花城「故郷のない人々」、『新東亜』1936.1。
- 8 朴花城「プルガサリ」、『新家庭』1936.1。
- 9 朴花城「かほちゃ」、『女性』1937.9。
- 10 徐正子「朴花城の解放後の小説と歴史意識」、『現代小説研究』24、2004、p.52。
- 11 朴花城『吹雪の銀河』、『朴花城文学全集』第14巻、プルン思想社、2004、p.283。
- 12 「第5回素影朴花城文学フェスティバル」(2011.10.22-23)は、「朴花城文学と大衆叙事」をテーマに開催された。
- 13 朴花城『峠を越えれば』、『韓国日報』1955.8-1956.4。
- 14 徐正子、前掲論文、p.66。
- 15 朴花城『崖に咲く花』、『連合新聞』1957.10-1958.5。
- 16 徐正子、前掲論文、p.64。
- 17 金福順「1950年代の朴花城の小説に表れた大衆性の再編とジェンダー」、『第5回素影朴花城文学フェスティバル論文集』、朴花城研究会、p.12。
- 18 朴花城『崖に咲く花』、『朴花城文学全集』(前掲)第5巻、p.404。
- 19 金福順、前掲論文、p.12。
- 20 同上、p.17。
- 21 李奉範「1950年代の新聞ジャーナリズムと文学」、『津橋語文研究』29、2010、p.263。
- 22 同上、pp.270-271。
- 23 同上、p.264。

- 24 同上、pp.266-267。
- 25 同上、p.285。朴花城『吹雪の銀河』（前掲）、p.298。
- 26 李奉範、前掲論文、p.283。
- 27 朴花城『明日の太陽』、『京郷新聞』1958.6-12。
- 28 朴花城『明日の太陽』、『朴花城文学全集』（前掲）第6巻、p.54。
- 29 朴花城『『明日の太陽』を終えて』、上掲書、p.419。
- 30 朴花城『明日の太陽』、上掲書、p.141。
- 31 同上、p.318。
- 32 例えば、『峠を越えれば』では光州学生事件を主導した人物が、一方では妻以外の女性に心を寄せ、さらに他の女性との間に子供をもうけるという、独立運動家の功績を貶めるような設定になっている。
- 33 金福順、前掲論文、p.13。
- 34 三枝勝壽「八・一五以後における親日派問題－解放後の朝鮮文学－」、『朝鮮学報』118、1985、p.77。
- 35 朴花城、『『明日の太陽』を終えて』（前掲）、p.420。
- 36 朴花城『明日の太陽』（前掲）、p.60。
- 37 同上、p.128。